

庄内協同ファームだより

No.145 2013年5月号



発行/
〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338
tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140
http://www.shonaifarm.com



鶴岡市天神祭：菅原道真公行列

時の流れるのは早いもので、ちよつと前まで大雪の中で毎日雪掻きをしていたのですが、「アツ」と言う間に雪が溶け春の日差しが眩しい季節となりました。「フワツ」と暖かい風が吹く日は初夏を思わせる日もあり季節の移ろいの早さを感じます。
歳なのかなあ〜(笑)
去年は4月3日4日に爆弾低気圧が庄内地方を襲って農業施設に甚大な被害をもたらしました。私もハウスのナイロンが破かれる被害がありました。今年も台風並みの低気圧が4月7日8日に襲ってきて、またか?と心配し「ゴゴゴ」という暴風雨が気になり、夜眠れずにいたのですが被害はほとんど無く安心しました。近年の急激な天候変化には閉口してしまいます。
私の場合、鳥達の鳴き声で季節の変化を感じる事が多くあ

ります。雪がほとんど無くなる頃に「ブテツポッポ」と鳩が鳴き出すと「ああ〜春がやってくるなあ〜」と感じます。肌寒い日もありますが、虫達が徐々に動き始めると同様に私も少しずつ動き始めます。
冬の間は仕事がほとんど無く冬眠している様なもので、のんびりとした生活に慣れきった私にとって春の農作業はきつい作業の連続です。ゆっくり体を動かし慣らしていく体の錆を少しずつ取っていきます。すると、ある時期(毎身体調の変化で予定ではない)を過ぎると急に動けるようになり朝の目覚めが早くなります。
桜の花が咲く頃には「ホーホケキョ」と遠くからウグイスの鳴き声が聞こえはじめます。ウグイスは上手に鳴くのとそうでないのがいます。上手く鳴けないウグイスの声を聞くと微笑しく思うのは私だけでしょうか(笑)。その頃には「種時き」「田耕し」「代掻き」「田植え」等々春の農作業が本格的になります。田んぼの作業は順調に行けば5月の「ゴールデンウィーク」を過ぎた辺りから田植えが始まり中旬になると本格的な田植えの季節となります。田植えが終わると庄内平野は一面、緑の絨毯を敷いたような綺麗な景色が広がります。
田植えが一段落し、風に暖かさを感じる頃、カッコウ、カッコウと爽やかに鳴くカッコウが初夏の訪れを告げてくれます。その頃、私の田んぼでは可愛い鴨たちが元氣よく田んぼを泳ぎ廻っている頃です。鴨たちは田んぼの虫や草などを食べ、稲の生長に伴い大きくなっていきます。
さて今年はどうな天気になるでしょう。
平年通り、いつも通りが一番ですが最近はどこかに大きな気象変化が訪れています。
今年はずっと(合掌)



通称「化けもの」の振舞い酒

副代表 今野 裕之

第13回 生産者集会

3月5日に第13回生産者集会が開催され、39名の参加がありました。

いつものように午前中は2012年度の活動報告と2013年度の活動計画で、それぞれの委員会や部会から発表をしてもらいました。

午後の部は講演です。特に今年は二人の方から講演を頂き、とても聞き応えがありました。

まず一人目は、らでいっしゅぼーや株式会社代表取締役副社長の小関純さんから「らでいっしゅぼーやのビジネスモデルと今後の取り組みについて」ということで、今後はドコモグループとの連携・インターネット通販(スマートフォン・タブレットを含む)で顧客を増やす、さらに今まで以上に生産者ごとの独自性・創造性を発信していき、らでいっしゅぼーや



左：らでいっしゅぼーや株式会社代表取締役副社長の小関純さん
右：山形大学名誉教授の粕淵辰昭先生

のブランド化を促進するというお話でした。今まで聞いたことのないような業界用語がバンバン出てきて難しい内容でしたが、聞いていて引き込まれました。

二人目の講演は山形大学名誉教授の粕淵辰昭先生から「米の無肥料・無農薬で多収栽培は可能か？」という演題でお話をいただきました。土とは何か、水田の歴史、江戸農書からの引用(中耕除草の回数について)や、除草機による多数回除草試験の結果、さらに植え付け本数での収量の違いなど5年にわたる取り組みについて話していただきました。16cm間隔の一本植え、除草機で8回除草するのが良いようです。今後、有機栽培のその先にどんな道があるか考えた時、向かうべき方向の一つだろうと思いました。お二人



には懇親会にも参加していただき、組合員たちとの多くの質疑応答もあり、大変盛り上がりしました。

富樫 俊悦

商 品 紹 介

玄米あられ 揚げ潮あられ

私どもの「玄米あられ」「揚げ潮あられ」の商品を案内させていただきます。

この2つのあられは、法人発足後3年目にして商品化になりました。1998年ごろの発売と記憶

しております。自分たちの生産しているもち米を何とか形にできないかと考えた挙句にたどり着いたのがこれらになります。

当初から食べ物についてはこだわりのあり、安全志向が最優先でした。まだ無農薬農業、無化学肥料中心で有機栽培の確立されていない時代のことです。

商品化までは試行錯誤の連続でした。現在でもあられの塩分濃度1%と定めているのは、その当時決定したものです(人体の塩分濃度とほぼ同じ程度)。もち米(でわのもち)本来の香ばしさを損なうことなくあられにした形が、考えの基となっております。

とても地味な「あられ」たちですが、今後ともよろしくご愛顧くださいますようお願い申し上げます。

有限会社庄内協同農産 代表 五十嵐英一



TPP反対集会に参加して

～国の土台を失って、日本は何処へ行くのか～

富樫 英治

TPP断固反対を掲げた山形県民緊急集会が去る3月16日に開催され、約850人が県内各地から結集し、庄内協同ファームからも有志5人が参加してきました。

政府が発表したTPPに参加した場合の経済効果は、農林水産業への打撃が3兆円のマイナスに対して、GDPが0.6%(3.2兆円)の増加しか見込めず、ほぼプラスマイナスゼロの状態。しかも、先日発表されたTPP交渉参加に向けた日米合意文書によれば、自動車の輸出関税は高止まりのまま、農業や保険分野でも日本のルールが無視され、米国がより有利になるような条件ばかりで日本のメリットは何もないという交渉結果が発表されました。TPPの問題は、とかく農業と工業の対立構図で語られがちですが、戦後から続く米国との従属関係の中で、沖縄の基地問題や原発の問題、そしてこのTPPにおいても問題の本質は根が同じであるように感じます。日本の経済的デメリットだけでなく食の安全や命の安全までも米国の国益に飲み込ませながら、尚も政府がTPP参加にのめりこまなければならない理由は、中国の経済的台頭と北朝鮮情勢の



緊迫化に向けて、日米同盟の強化を最優先課題とした為で、日本経済を立て直すための参加ではないことが、すでに明らかになったと言えるのではないのでしょうか。



とは言え、一度農産物の完全自由化の波が押し寄せれば、国内の農業生産は壊滅的な打撃を受けることは必須です。それは、日本を支えてきた農村のコミュニティや文化、景観、自然環境保全の崩壊をも招くものです。私達農家がこの状況に対してどのように立ち向かっていかなければならないのかを考える時、まず、徹底的にTPP参加に抵抗していくのは当然のこととして、これまで庄内協同ファームを応援してくださった消費者の皆さんと信頼関係をより強いものに発展させ、今後も安心安全な農産物を皆様にお届けする努力を今まで以上に続けて行く地道な歩みが、TPPを抗う、ひいては日本国民が自分たちの意思で生きる権利を獲得する第一歩になるのだと今考えています。



父から我が子へ

我が子がバスケットボールを始めて7年目を迎えた。始めたのは小学3年生、身長134cm・体重42kg、どう考えてもその体型ではない。ドリブルできない、キャッチできない、動作は鈍い、ジャンプできない、走れない…なぜバスケなのか。幼稚園からの友達に誘われてなんとなく入ったようだ。でも、どんなに下手でも一生懸命がんばっている姿、どんなに足がおそくとも最後まで走りぬく姿勢に親は応援するしかなかった。シュート練習、朝のランニングに付き合い、数多くの遠征等の送迎と応援、遠征後、車の中は反省会の場だった。6年生最後の県大会、準々決勝1ゴール差で敗れた時の涙、そして東北大会出場をかけた最後の試合に勝った喜び、その瞬間は最高の感動だった。

そんな小学校時代を経て彼ももう中学3年生。あと少しの部活動

だがレギュラーの座は果てしなく遠く、試合・練習試合は数多くあるがベンチで応援する日々。たまに出たかと思うと、ちょっと失敗してはベンチに下げられ叱られてばかり。やる気がない、真剣に練習していない、足がおそい、それでも3年生か、なぜパス?なぜシュート?…。

中学では「もうやめろ」「やめない、やらせて下さい」何度となく親子で言い合ってきた。でもあと少し、ここまできたら最後に「やっぱりバスケはどんなことがあっても楽しい」と言えるようにがんばってほしい。親はなんだかんだ言っても結局子どものがんばっている姿に一喜一憂し、子どもから楽しませてもらっているように思う。どんな形であれ、最後には思いっきりほめてやりたい。



ペンリレ 徒然草

菅原 すみ



四月になると
朝早くからトラ
クターの音が賑
やかに聞こえて
きます。つい最

近まで除雪のために動き回っていたトラクターは、今では田圃一面に堆肥散布や、農道の整備にと動き回っています。あたりに漂う堆肥の発酵した匂いと共に地域の仲間が共同で作業をしている話し声が弾んでいて、今年もいよいよお米作りが始まりました。私の住む地区では、有機栽培の米作りが多く生産者に広がっていて、省力化の為に共同で始めた堆肥散布作業は23年継続しています。種蒔き、田植えなどは各個人で行います。

は益々高まってきて三年前からは70歳になる人も加わりました。

有機栽培米価格は慣行栽培に比べるとわずかに高いだけで、その労力に見合う価格にはなっていませんが、この気力の源・モチベーションは何だろうかとその人に聞いたことがあります。「おじいちゃんのお米が一番おいしい」と言う孫の言葉で今年も頑張ろうと思ふといいました。遠くで暮らす私たちの孫も「おじいちゃん、ごはん(茶碗)ピカピカにしたよ」と夫に電話をかけてきます。家族が、そして地区の学校給食を食べる子供達が、有機米を食べ、「おいしい」と感じて、そして経営面でもプラスとなり、「幸せ」と思う人が周りに増えていったら・・・これが本来あるべき農業の姿なのかなあと思います。

TPP交渉参加を推進している人達の主張する「競争に勝つための強い農業」ではなくて、多くの人たちを幸せにする農業の姿を追い求めて実践していきたいと思います。

今年の春、私もお米作りに少し参加できていることがうれしくてなりませぬ。自分の不注意から怪我が続き一年の間に三回の手術と入院を繰り返して、夫と家族に迷惑をかけてしまいました。

一週間ベットにくくりつけられて日々思うことは、元気に動けて以前のよように作物を育てて暮らしていきたいと言ったいでした。リハビリの甲斐もあり、しゃがんだり、指先の細かい作業は難しいのですが、今は種蒔きに向けて育苗箱の土詰め作業をしています。夫と息子と一緒に働けることのありがたみをつくづく感じるこの頃です。

久しぶりの穏やかな春の日、遠くの山々を眺めると青空に映えて神々しくそびえ立つ月山と鳥海山が裾野にまで雪を湛えていて、夏の水不足を心配しなくていいよと手を広げて米づくりや野菜づくりを応援してくれているようです。

うん！以前のように今年も頑張るよ！



あとがき



「端午の節句」は古代中国発祥の厄払い行事です。「端」は初めという意味で、「端午」は「月の初めの午(つま)の日で、五月に限ったことではありませんでした。やがて、五月が十二支でいつ午の月あり、「午(こ)の日」が「五の日」に通じることや、奇数が重なっておめでたい、重女(ちゅうじょ)「こ」の日でもあるため、「午の月の端の午の日」「端午」といえる五月五日をさすようになりました。この時期は季節的にも雨季を迎えることから、病氣や災厄の被いは大事な行事、盛りを迎える香り高い菖蒲や蓬(よもぎ)が邪気を祓うとされ、蓬で作った人形(ひとがた)を軒に飾ったり、菖蒲酒を飲んだり、菖蒲湯に浸かって邪気を祓いました。こうした古代中国の風習が日本に伝わり、平安時代に端午の節会(せちえ)という宮中行事になりました。

日本には古来より、「早乙女のおまつり」というものがあり、田植え月の五月に「五月忌み」という行事をしていました。昔は神聖な行事である田植えは早乙女(若い清らかな女性の事)がするものとされ、田植えを控えて物忌み(一定期間、不浄を避けて心身を清めること)をしていました。やがてここに端午の節句が結びつき、早乙女は菖蒲や蓬で屋根を葺いた小屋に前夜からこもっては御被いをして、神聖な存在になつてから田植えに臨むようになりました。女性のためのおまつりであり、当時の女性にとっては堂々と休める嬉しい日でもあったそうです。(熊)